春期福音特別集会（１）（京都）

七つの燈台

――ヨハネ黙示録第１章～３章――

１９８４年６月９日
小池辰雄

終末的な希望　顕示　アルパ・オメガ　人の子のごとき者　大死・大無　エペソ　帰入・転入
スミルナ　ペルガモ　テアテラ　サルデス　御霊の体験　ヒラデルヒヤ　ラオデキヤ　御霊の勝利

【ヨハネ黙示録１】

1これイエス・キリストの黙示なり。即ち、かならず速かに起こるべき事を、その僕どもに顕させんとて、神の彼に与えしものなるを、彼その使を僕ヨハネに遣して示し給えるなり。2ヨハネは神の言とイエス・キリストの証とに就きて、その見しところを悉とく証せり。3此の預言の言を読む者と之を聴きて其の中に録されたることを守る者等は幸福なり、時近ければなり。

4ヨハネ書をアジヤに在る七つの教会に贈る。願くは今在し、昔在し、後来りたもう者および其の御座の前にある七つの霊、5また忠実なる証人、死人の中より最先に生まれ給いしもの、地の諸王の君なるイエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。願くは我らを愛し、その血をもて我らを罪より解放ち、6われらを其の父なる神のために国民となし祭司となし給える者に、世々限りなく栄光と権力とあらんことを、アァメン。7視よ、彼は雲の中にありて来りたもう。諸衆の目、殊に彼を刺したる者これを見ん、かつ地上の諸族みな彼の故に歎かん、然り、アァメン。

8今いまし、昔いまし、後きたり給う主なる全能の神いい給う『我はアルパなり、オメガなり』

9汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの艱難と国と忍耐とに与る我ヨハネ、神の言とイエスの証との為にパトモスという島に在りき。10われ主日に御霊に感じいたるに、我が後にラッパのごとき大いなる声を聞けり。11曰く『なんじの見る所のことを書に録して、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒア、ラオデキヤに在る七つの教会に贈れ』12われ振反りて我に語る声を見んとし、振反り見れば七つの金の燈台あり。13また燈台の間に人の子のごとき者ありて、足まで垂るる衣を着、胸に金の帯を束ね、

14その頭と頭髪とは白き毛のごとく雪のごとく白く、その目は焔のごとく、
15その足は炉にて焼きたる輝ける真鍮のごとく、その声は衆の水の声のごとし。16その右の手に七つの星を持ち、その口より両刃の利き剣いで、その顔は烈しく照る日のごとし。17我これを見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり。彼その右の手を我に按きて言いたもう『懼るな、我は最先なり、最後なり、18活ける者なり、われかつて死にたりしが、視よ、世々限りなく生く。また死と陰府との鍵を有てり。19されば汝が見しことと、今あることと、後に成らんとする事とを録せ。20即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈台との奥義なり。七つの星は七つの教会の使にして、七つの燈台は七つの教会なり。

【ヨハネ黙示録2】

1エペソに在る教会の使に書きおくれ。
「右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燈台の間に歩むもの斯く言う、
2われ汝の行為と労と忍耐とを知る。また汝が悪しき者を忍び得ざることと、自ら使徒と称えて使徒にあらぬ者どもを試みて、その虚偽なるを見あらわしたることとを知る。3なんじは忍耐を保ち、我が名のために忍びて倦まざりき。
4然れど我なんじに責むべき所あり、なんじは初の愛を離れたり。5然れば、なんじ何処より堕ちしかを思え、悔改めて初の行為をなせ、然らずして若し悔改めずば、我なんじに到り、汝の燈台をその処より取除かん。6されど汝に取るべき所あり、汝はニコライ宗の行為を憎む、我も之を憎むなり。7耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし、勝を得る者には、われ神のパラダイスに在る生命の樹の実を食うことを許さん」

8スミルナに在る教会の使に書きおくれ。
「最先にして最後なる者、死人となりて復生きし者、かく言う、9われ汝の艱難と貧窮とを知る――されど汝は富める者なり。我はまた自らユダヤ人と称えてユダヤ人にあらず、サタンの会に属く者より汝が譏を受くるを知る。
10なんじ受けんとする苦難を懼るな、視よ、悪魔なんじらを試みんとて、汝らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日のあいだ患難をうけん、なんじ死に至るまで忠実なれ、然らば我なんじに生命の冠冕を与えん。11耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし。勝を得るものは第二の死に害わることなし」

12ペルガモに在る教会の使に書きおくれ。
「両刃の利き剣を持つもの斯く言う、13われ汝の住むところを知る、彼処にはサタンの座位あり、汝わが名を保ち、わが忠実なる証人アンテパスが、汝

等のうち即ちサタンの住む所にて殺されし時も、なお我を信ずる信仰を棄てざりき。14然れど我なんじに責むべき一二の事あり、汝の中にバラムの教を保つ者どもあり、バラムはバラクに教え、彼をしてイスラエルの子孫の前に躓物を置かしめ、偶像に献げし物を食わせ、かつ淫行をなさしめたり。15斯のごとく汝らの中にもニコライ宗の教えを保つ者あり。16されば悔改めよ、然らずば我すみやかに汝に到り、わが口の剣にて彼らと戦わん。17耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし、勝を得る者には我かくれたるマナを与えん、また受くる者の外、たれも知らざる新しき名を録したる白き石を与えん」

18テアテラに在る教会の使に書きおくれ。

「目は焔のごとく、足は輝ける真鍮の如くなる神の子、かく言う、19われ汝の行為および汝の愛と信仰と職と忍耐とを知る、又なんじの初の行為よりは後の行為の多きことを知る。20されど我なんじに責むるべき所あり、汝はかの自ら預言者と称えて我が僕を教え惑し、淫行をなさしめ、偶像に献げし物を食わしむる女イゼベルを容れおけり。21我かれに悔改むる機を与うれど、その淫行を悔改むることを欲せず。22視よ、我かれを床に投げ入れん、又かれと共に姦淫を行う者も、その行為を悔改めずば、大いなる患難に投げ入れん。23またかれの子供を打ち殺さん、斯てもろもろの教会は、わが人の腎と心とを究むる者なるを知るべし、我は汝等おのおのの行為に随いて報いん。24我この他のテアテラの人にして未だかの教えを受けず、所謂サタンの深きところを知らぬ汝らに斯くいう、我ほかの重を汝らに負わせじ。25ただ汝等はその有つところを我が到らん時まで保て。26勝を得て終に至るまで我が命ぜしことを守る者には、諸国の民を治むる権威を与えん。27彼は鉄の杖をもて之を治め、土の器を砕くが如くならん、我が父より我が受けたる権威のごとし。28我また彼に曙の明星を与えん。29耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし」

【ヨハネ黙示録3】

1サルデスに在る教会の使に書きおくれ。

「神の七つの霊と七つの星とを持つ者かく言う、われ汝の行為を知る、汝は生くる名あれど死にたる者なり。2なんじ目を覚し、殆ど死なんとする残りのものを堅うせよ、我なんじの行為のわが神の前に全からぬを見とめたり。3然れば汝の如何に受けしか、如何に聴きしかを思いいで、之を守りて悔改めよ、もし目を覚さずば盗人のごとく我きたらん、汝わが何れの時たるかを知らざるべし。4然れどサルデスにて衣を汚さぬもの数名あり、彼らは白き

衣を著て我とともに歩まん、斯くするに相応しき者なればなり。5勝を得る者は斯のごとく白き衣を著せられん、我その名を生命の書より消し落とさず、我が父のまえと御使の前とにてその名を言いあらわさん。6耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし」

7「ヒラデルヒヤにある教会の使に書きおくれ。

聖なるもの真なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉ずる者なく、閉ずれば開く者なき者かく言う、8われ汝の行為を知る、視よ、我なんじの前に開けたる門を置く、これを閉じ得る者なし。汝すこしの力ありて我が言を守り、我が名を否まざりき。9視よ、我サタンの会、すなわち自らユダヤ人と称えてユダヤ人にあらず、ただ虚偽をいう者の中より、或者をして汝の足下に来り拝せしめ、わが汝を愛せしことを知らしめん。10汝わが忍耐の言を守りし故に、我なんじを守りて、地に住む者どもを試むるために全世界に来らんとする試練のときに免れしめん。11われ速かに来らん、汝の有つものを守りて、汝の冠冕を人に奪われざれ。12われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、彼は再び外に出でざるべし、又かれの上に、わが神の名および我が神の都、すなわち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と、我が新しき名とを書き記さん。13耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし」

14「ラオデキヤに在る教会の使に書きおくれ。

アァメンたる者、忠実なる真なる証人、神の造り給うものの本源たる者かく言う、15われ汝の行為を知る、なんじは冷かにもあらず熱きにもあらず、我は寧ろ汝が冷かならんか、熱からんかを願う。16かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微温が故に、我なんじを我が口より吐出さん。17なんじ、我は富めり、豊なり、乏しき所なしと言いて、己が悩める者・憐むべき者・貧しき者・盲目なる者・裸なる者たるを知らざれば、18我なんじに勧む、なんじ我より火にて煉りたる金を買いて富め、白き衣を買いて身に纏い、なんじの裸体の恥を露さざれ、目薬を買いて汝の目に塗り、見ることを得よ。19凡てわが愛する者は、我これを戒め、之を懲す。この故に、なんじ励みて悔改めよ。20視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もし我が声を聞きて戸を開かば、我その内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん。21勝を得る者には我とともに我が座位に坐することを許さん、我の勝を得しとき、我が父とともに其の御座に坐したるが如し。22耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし」』

●終末的な希望

ヨハネ黙示録第1章から3章までを『七つの燈台』という題でお話します。「燈台」とは教会を指していて、小アジアの七つの教会とは、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤです。この七つの教会はペルガモを最北として西南にスミルナ、エペソの二つ、東南にテアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤの四つの教会が雁行形を成して位置しています。

終末的な希望がなかったら、人生は、

「空の空なるかな」

です。そういう意味において、黙示録は非常に希望の書である。世界がひっくり返った後の世界ですから、その希望を現実としなければいけない。信・愛・望ということです。非常に切羽詰まった現実において、使徒ヨハネがパトモスの島に流されて――これも迫害によって流されたわけですが――その島でこういった啓示を受けて、それから後でエペソで書いたのでしょう。パトモスで書いたわけではないらしい。

ローマのネロの後の、ドミティアヌス帝（在位81～96年）の迫害時代にこの啓示を受けた。ヨハネ伝そのものも大体、紀元100年位に書かれ、福音書の中で一番後です。パウロの書翰の方がむしろ先に書かれた。そういう背景のものです。

キリストも使徒たちも、

「世の終りは近い」

という現実で動いていた。

「神の国は近づいた。汝ら悔改めよ」

というのは、文字通りその意味ですから。そういう終末的な現実において掲げられた、終末的な希望なんです。我々は、二千年経っているけれども、今の現実がまた非常に終末的な現実です。神の国は、延びれば延びているほど、終末性というものは逆比例して強くなってくる。そういう現実において示されたところの啓示です。これは天界のキリストの霊が啓示されたわけです。その言といい、その幻といったら、想像もつかないような幻ですから。

構造からいうと、プロローグ（序文）にあたるところは1章1節から8節です。本文は1章9節から22章5節まで。エピローグ（末文）は22章6節から21節までです。

●顕示

1章1節のところに、

1 **これイエス・キリストの黙示なり。**

とある。この「黙示」「アポカリュプシス」という字は本当は「顕示」なんです。

「覆（おお）われたものを明らかにする」

という字です。「黙示」という訳が訳としては間違っている。「覆いをとる、ベールをはらう」という字です。

即ち、かならず速かに起こるべき事を、その僕どもに顕させんとて、神の彼に与えしものなるを、彼その使を僕ヨハネに遣して示し給えるなり。

「速かに」とは速度が速いことです。預言者も使徒もみな「僕」です。

2ヨハネは神の言とイエス・キリストの証とに就きて、その見しところを悉とく証せり。3此の預言の言を読む者と之を聴きて其の中に録されたることを守る者等は幸福なり、時近ければなり。

もう切迫しているという。「その見しところ」というのは、現に啓示を受けた、そういうものがこの「見しところ」ということで、1章9節から22章5節までのところです。

4ヨハネ書をアジヤに在る七つの教会に贈る。

「七つ」ばかりでなく、もっと在るけれども、ここに特に選ばれたのは七つです。「三」が天的な数字で、「四」が地的な数字で、これを合わせると「七」なんです。「三」は神・聖霊・キリストの三位一体の三です。「四」は東西南北です。

願くは今在し、昔在し、後来りたもう者

これは順序がおもしろい。一番先に、「今在まし」と書いてある。神さまは現在し現前している方です。だから、

「今在し、昔在し、後来りたもう者」

という。また、「後在らん者」という言い方もある。「ホ　エソメノス」というギリシア語を使えば「後在らん者」という意味になる。「今在し、昔在し、後来りたもう者」とは要するに、

「永遠者」

ということです。

「アーメン」という字がある。これは名詞にすると「エメツ」という字ですけれども、「エ」はギリシア語のアルファにあたり、「ツ」（タウ）はギリシア語のオメガにあたる。「メ」は真ん中です。だから、「始めと中と終り」ということで、

「始めと中と終りを持つ者」

は、これを「真理」という。それを現実に成らせるものは真理なんです。真の現実です。始めと終りとは創世記と黙示録、創造と完成です。真ん中は歴史です。そういう「今・昔・後」ということ。この永遠者は創造と完成を持っている。非常に目的的に臨んでおられる。目的のあるところの経過が即ち歴史になるわけです。ところが、神の歴史を人間は惨憺たるものにしてしまった。だから、最後にこの惨憺たるものを刈り取ることが「最後の審判」で、世界が崩れる。それから、「新天新地」に来るわけです。聖書の啓示するところは、段々地上は天国になるのではない。但し、地上に必ず天国を現じていく人たちがいなくてはいかん。

●アルパ・オメガ

および其の御座(みくら)の前にある七つの霊、5また忠実なる証人、死人の中より最先(いやさき)に生まれ給いしもの、地の諸王の君(きみ)なるイエス・キリストより賜う恩恵(めぐみ)と平安と汝らに在らんことを。

パウロと同じような言い方をしています。「忠実なる証人」とか、これはみなキリストを言っているわけです。

願くは我らを愛し、その血をもて我らを罪より解放(ときはな)ち、6われらを其の父なる神のために国民となし祭司となし給える者に、世々限りなく栄光と権力(ちから)とあらんことを、アァメン。

「国」とは「バシレイア」という字が使ってありますから、「王国」のことです。「ラオス」(民)ではない。「神のために国となし」とは

「神の支配するところの国となし」

ということです。その「神の支配するところの国となる」一人ひとりは、ある意味において、「王者」なんです。それから、祭司です。王者は、ある意味において、また預言者でもある。預言者と祭司ということ。これは本質的な意味です、職業の意味ではない。だから、クリスチャンは、ルターが『クリスチャンの自由』でも言っているとおり、

「何者にも依存しないところの王者であると同時に、また一切の者に依存するところの即ち執成しをなすところの祭司である」

という気持がここにも表れている。

7視よ、彼は雲の中にありて来りたもう。

「雲」といっても、これは普通の雲ではない。霊雲です。こういう事態は黙示文学に出てくるので、ダニエル書7章13節にあるのと同じことです。

「人の子が雲に乗って来る」

という。これはキリストの再臨の暗示を与えているわけです。こういう言い方はマタイ伝24章30節、26章64節にも出ています。

諸衆(もろもろ)の目、殊(こと)に彼を刺したる者これを見ん、

「殊に」というギリシア語の言葉はそれほど強い言葉ではなく、「カイ」「しかも」という字です。キリストを刺した者、即ち迫害した者がこれを見て驚くというわけです。要するにキリストに逆らった者です。

かつ地上の諸族みな彼の故に歎(なげ)かん、然り、アァメン。

妙なことが書いてありますが、キリストを信じない者たちには、これが現れると、呻き嘆きになる。キリストを信じる者にはキリストの再臨は大きな歓びになる、という意味です。

8今いまし、昔いまし、後きたり給う主なる全能の神いい給う

「今いまし、昔いまし、後きたり給う主なる全能の神」ということと、キリストとが二重写

しになった表現になっている。

『我はアルパなり、オメガなり』

これはキリストも言ってらっしゃる。

「創造であり、完成であるぞ」

ということ。皆さんがキリストに在って始めたことは必ず成就する。どんな途中でもって、それが終わろうとも、それは未完成の完成の姿なんです。三日月です。神に在って、キリストに在って始められたものは必ず円現する。だから、いつ倒れても、アーメン・ハレルヤです。質的にはこれは全的なものなんです。全的ということは非常に大事なことです。毎日毎日が全的な生き方をしていると、一日が一生である。

ヘブライ語の「エメツ（まこと）」という字は「始中終」という字です。ミルトンの『パラダイス・ロスト』の中にも、

「始めにして終りにして中なる者に誉れあれ」

というような言葉が出てくる。

●人の子のごとき者

9 **汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの艱難（なやみ）と国と忍耐とに与（あずか）る我ヨハネ、**

非常に親しく言っている。「艱難」というのはもちろん迫害のことをいう。「国」とは最後の新天新地の神の国のこと。「忍耐」というのはむしろ「忍待」と書いた方がいいくらいで、忍び待つこと、待望です。「忍」という言葉はなかなか深い意味を持っています。「忍待」というのは「ヒュポモネーン」という字です。

神の言とイエスの証（あかし）との為にパトモスという島に在りき。

「在りき」とある。だから、これは書いている時は「パトモス」の島ではなかったわけです。パトモスはミルトスの南西40マイル位の所のエーゲ海の島で、幅が5、6マイル、長さが10マイル位の島だそうです。

10 **われ主日（しゅじつ）に御霊に感じいたるに、我が後にラッパのごとき大いなる声を聞けり。**

この「御霊に感じた」というのはいい加減なことではない。エクスタシーの状態なんです。完全に霊界に入ってしまった状態です。主観的に言っているのではない。「ラッパ」というのはよく出てくる。マタイ伝24章、コリント前書15章にも出てくる。

11 **曰（いわ）く『なんじの見る所のことを書に録（しる）して、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒア、ラオデキヤに在る七つの教会に贈れ』**

12 **われ振反（ふりかえ）りて我に語る声を見んとし、振反り見れば七つの金の燈台あり。**

「語る声を見んとて」とは何ですか。声を見る。観音という言葉があるけれども。霊的な状態では、語る声において姿が見えるわけだ。だから、「声を見る」という直接的な言い方に

なる。「姿を聞く」という表現もできる。その姿を見ていると、発しているところの内容が聞こえてくる。「燈台」というと、我々は灯台守の灯台のことを思うけれども、そうではない。これは燭台、「メノラー」のことです。七つの枝があって、それぞれにローソクがつく。燭台のことは旧約では出エジプト記25章31節以下を見てください。

13**また燈台の間に人の子のごとき者ありて、足まで垂(た)るる衣を着、胸に金の帯を束(つか)ね、**

「人の子のごとき」と言ったって、これは本当は「人の子」なんです。あまり異様なものだから、「ごとき」なんて言ったわけです。これはダニエル書7章からきています。「足まで垂(た)るる衣を着」とは、これは品格のある姿です。

14**その頭と頭髪(かみのけ)とは白き毛のごとく雪のごとく白く、**

「白い」ということは、これは霊の光なんです。キリストが山上で祈られた時、衣が光って眩しかったとある。あれは霊が衣を被ってしまうわけです。それで光る。あるときは、炎がたったりする。

その目は焔(ほのお)のごとく、15**その足は炉にて焼きたる輝ける真鍮(しんちゅう)のごとく、**

これは非常な光と熱を持っている姿です。そして、頑強で崩れない。大変な幻です。こういった幻を絵に描いているのはドイツの画家のデューラーです。デューラーの挿画が黙示録にたくさん入っているドイツ語の聖書もあります。

その声は衆水(おおく)の声のごとし。

ゴーッと鳴っているんだね、大波か大滝みたいに。

16**その右の手に七つの星を持ち、その口より両刃(もろは)の利き剣(つるぎ)いで、**

そういう絵がある。「両刃の剣」とは審判を表している。イザヤ書11章。

その顔は烈しく照る日のごとし。

普通の目ではとても見れないような畏るべき、非常に象徴的な姿です。

●大死・大無

17**我これを見しとき其の足下(あしもと)に倒れて死にたる者の如くなれり。**

これは大事なことです。ぶっ倒れる。相手は神的な存在だから、こっちはぶっ倒れてしまう、死んだようになってしまう。福音書を読んで、キリストにでっくわして、ぶっ倒れて、

「参りました！」

と言わなければ、その世界に入れない。

「意味がどうだこうだ」

なんて言っているうちはダメです。

「足下に倒れて死にたる者の如くなれり」

とある。大死、大無。自分が本当に無き者になっていなければ、こんな所は読めない。

彼その右の手を我に按きて言いたもう
按手された。
『懼るな、我は最先なり、最後なり、
これが、
「アルファなり、オメガなり」
です。この、
「懼るな」
がありがたい。もう死ぬようにぶっ倒れた時に、キリストは、
「恐いことはない。凄い世界に入れてやるぞ」
と言われる。次元の違ったものにぶつかると、みな恐れる。幽霊が出ても恐れるわけだ。
「神さまをまともに見たら、ぶっ倒れたり、死んだりする。見ることができたのは
モーセだけだった」
とか、旧約にも書いてある。
この大死・大無がもの凄い生の世界に、本当の有の世界に入れられる。これは相対的な有ではなく、絶対有です。絶対無と絶対有は同じこと。絶対死と絶対生。こういう概念は相対概念ではない。絶対概念です。「対」ということは相手が有るということ。本当の世界は、相手が有って無き世界に入らなければダメなんです、自分が有って無き世界に入らないと。
「自分がどうだこうだ」なんてことではない。こういう所を読んでいると、もうビリビリする。
『懼るな、我は最先なり、最後なり、[18]活ける者なり、
「お前を活かすぞ」と。
われかつて死にたりしが、視よ、世々限りなく生く。
これは十字架の死のことです。
「かつて十字架でもって贖罪死を遂げたが、今は活きてお前たちを活かす。永遠の
生命を与える」
と、これは正にヨハネ伝です。私たちの現実は本当にそういう現実ですから。
「かつて十字架でもって贖罪死を遂げたけれども、お前たちを限りなく活かさんが
ために活きているんだ」
と。
「そうですか、あなたは活きているけれども、こっちは死んでいますよ」
ではダメなんだ、活かされなくては。福の音信、福音なんだから。
また死と陰府との鍵を有てり。
「鍵を有てり」とは権威があるということ。
[19]**されば汝が見しことと、今あることと、後に成らんとする事とを録せ。**
「今在ること」というのは、2章、3章のところです。「後に成らんこと」というのは、4章

1節から22章の5節まで。大体、そういうように判断していいようです。

20**即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈台との奥義なり。七つの星は七つの教会の使にして、七つの燈台は七つの教会なり。**

「教会の使」と言ったって、代表の人ということもあるし、教会そのものとみてもいいし、それはどうでもいい。

●エペソ

次は黙示録第2章です。

1**エペソに在る教会の使に書きおくれ。**

とある。エペソは小アジアの一番大きな町と言っていい。一番西の端にある。ここにはアルテミスの神殿がある。使徒行伝19章に出てくる。偶像崇拝と皇帝崇拝の強い所です。そこへ福音が入ってきたら、すぐ迫害を受けたりする。エペソにはパウロも三年も伝道していた。アポロがいた所です。使徒行伝18章、19章の所を見てください。

「右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燈台の間に歩むもの斯く言う、

2**われ汝の行為と労と忍耐とを知る。**

「知る」とは「よく分かっているぞ」ということ。もちろんこれは良い意味で言っている。「行為」とは信仰から出ている行為であるし、「労」とは愛の働きです。「忍耐」とは終末の世界を、キリストの再臨を望んで忍び待つこと。そういった意味で、非常に深い三つの言葉です。

また汝が悪しき者を忍び得ざることと、自ら使徒と称えて使徒にあらぬ者どもを試みて、その虚偽なるを見あらわししことことを知る。

「よく、お前たちは見ている。いい加減な妥協はしないね」ということです。

3**なんじは忍耐を保ち、我が名のために忍びて倦まざりき。**

「忍びて倦まざりき」というのは、忍び徹すことです。私たちもキリストの名のためには生涯を忍び徹さなくては。今の私たちにはいわゆる迫害式なものはないけれども、この世との妥協、ごまかしはいかん。「妥協でなければ、ただ戦っているか」なんて、そういうことではなく、包みや担いの角度が非常に大事です。要するに、いわゆる妥協をしたらダメです、そこははっきりしていないと。

4**然れど我なんじに責むべき所あり、なんじは初の愛を離れたり。**

5**然れば、なんじ何処より堕ちしかを思え、悔改めて初の行為をなせ、**

この「初の愛」ということ。私たちにとっても初めの愛というのがあったわけです。信仰に入った時に、キリストに対する非常に熱烈な信仰の歓びと愛がある。しかし、そればかりではない。初めてキリストに愛されたことを感じた。キリストは常に愛しているのだけれども、こちら側からは、キリストの愛を初めて感じたのだから、これは初めの愛です。

キリストの愛を初めて感じた。こっちが初めて愛したのではない。愛するのは神の方が

先であることは、ヨハネの書翰にも書いてあるとおりです。キリストの愛はいつもかかっているのだけれども、初めてそれに気がついたこと、これが初めの愛です。キリストの愛は、我々の信ずると信じないとに拘らず、愛の顧みは終りまで続いている。背いたら、自分は地獄に堕ちるだけの話だ。

初めて感じた、そのことは新鮮な感じ方をしているわけです。その新鮮味は、いわゆる「ネオス」ではダメです、「カイノス」的な初め、新しさでないと。そして、それは終りに至るまでです。初めの愛は同時に終りであるわけです。アルファなるキリストの愛はまたオメガなるキリストの愛である。

「我はアルファにしてオメガなり」

とあるように。

「その愛に帰れ」というよりむしろ、本当はいよいよそれが強くならなくてはいけない。そこまでは言ってないけれども。

「初の愛を離れてしまった」

という。聖霊を受けると、初めの愛よりも、聖霊を受けた時の愛はもっと凄い愛になる。聖霊を受けたときのキリストの愛、御霊の愛、これは不変です。変わらないで、それはいろいろな形で現れてくる。愛の表現はいろいろですから。

●帰入・転入

5 **然れば、なんじ何処（いずこ）より堕（お）ちしかを思え、悔改（くいあらた）めて初（はじめ）の行為（おこない）をなせ、然らずして若（も）し悔改めずば、我なんじに到り、汝の燈台をその処より取除かん。**

「初の行為」というのは、初めの愛を受けて、その愛を人に伝えたいという行動が「行為」なんです。キリストの愛を受けて人を助けたりした、それが「行為」です。

「初めの愛を受けた時の初めの行為に帰れ、それを成せ」

ということです。ここに「悔改めて」とあります。これは、

「立ち帰る、回帰する、キリストのもとに全存在で回帰する」

ことです。ただ「悔いて改める」ということではない。

「キリストのもとに立ち帰れ」

ということです。立ち帰って、神・キリストに帰入する。そして御霊の力をいただく。そうしたら今度は、転入しなくてはいかん。他の人に向かって、その愛をもって自分を注ぐ。友のために生命を棄てるほどにまでやっていく。「帰入・転入」という作用が起きてくる。

「神・キリストに帰入すれば、上から力がくるから、隣人に転入する」

わけです。だから、

「神を愛することと人を愛することは一つだよ」

とキリストが言われたのはこの消息です。「愛する」と言ったって、これは感情ではない。

全存在的に帰入し、全存在的に転入するような在り方。これは一如の事態です。マルチン・ルターが『クリスチャンの自由』の最後の30節の所でそれと似たことを言っている、

「上に昇ったり下に降ったりしながら、それがまた人の愛へと移っていく。それが本当の在り方である」

と。

「我すべての事に於て例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言い給いし「与うるは受くるよりも幸福なり」との御言を記憶すべきなり』」（使徒行伝20・35）

「弱き者を助ける」

というのが初めの行為ということです。転入の方です。もし、「アルファ・オメガ」という表現を使うならば、帰入の方がアルファで、転入の方がオメガです。

この転入の角度がなくて、帰入だけやっていたらダメです。召団は互いに相助けていかなければいかん、転入行為がなくては。みな特色を持っている。お互いに尊重しながら、お互いに助け合いながらいく。御霊の愛でそうやっていくなら、絶対に召団は崩れません。そうでなくて、人間的に統一しようとしたり何か計ろうとしたら、崩れていきます。人間的なものはダメです、全部、御霊の力でいかなければ。どうせ、人間はお互いに欠陥があって、滑ったり転んだりするのだから。

「滑っても転んでも担いでいきますよ」

という間柄でなければダメです。

●スミルナ

次はスミルナです。ここはやはり皇帝崇拝のある所だ。スミルナで忘れてならない一つの名前がある。それは「ポルュカルポス」（69～155年）という殉教の死を遂げた人です。この人は聖霊の人だ。異教の祭に参加するように言われた時に彼は断った。キリスト教を棄てることを拒んだ。そうしたら、彼は火刑に処せられた。ところが、火が燃えつかない。聖霊の波動が火をよけてしまう。それで、死刑執行者が槍で彼を刺した。その血がその火を消した。それくらいのもの凄い霊的な実存です。キリストの中に本当に入って、全身が炎の如くなったら、火よりも熱いから。

8**スミルナに在る教会の使に書きおくれ。**

「最先にして最後なる者、死人となりて復生きし者、かく言う、9**われ汝の艱難と貧窮とを知る**

「艱難」とは迫害のこと。非常にいろいろなことで苦しんでいることを知っている、と。

――されど汝は富める者なり。

とは、霊的に富んでいることです。

我はまた自らユダヤ人と称えてユダヤ人にあらず、サタンの会に属く者より
汝が譏を受くるを知る。

これはいわゆるグノーシス派のことらしい。非常に知的な方に偏っている。

アンテオケのイグナティオス（35～107年）という人も有名な人です。これはポルュカルポスの親友でした。イグナティオスというのが「クリスティアニスムス」（キリスト教）という言葉や、「へ　カトリケー　エクレシア」（カトリック教会）という言葉を初めて用いた。

10 **なんじ受けんとする苦難を懼るな、視よ、悪魔なんじらを試みんとて、汝らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日のあいだ患難をうけん、なんじ死に至るまで忠実なれ、然らば我なんじに生命の冠冕を与えん。**

「死に至るまで忠実であれ」とは、

「死に至るまでアーメンであれ」

ということです。

「アブラハム、エホバを信ず」

という、あの「信ずる」という字が「アーメン」です。

「エホバを真とした」

ということ。魂の向きを変えないわけです。それは別な言葉でいうと、

「常に回帰していろ」

ということです。そして、その中に入り込んでしまっている。頑張って忠実ではない。本当の忠実というのは、キリストの中に自分が入ってしまっていて、

「そうですか、忠実ですか」

なんて言うくらいな姿が本当の忠実だ。忠実が自然になっている。力んで道徳的に忠実なんて言っているのではない。溶け込んでしまっている。それが自然霊然の姿になっているわけだ。自然界は自然だが、人間の本当の自然の姿は霊然ということです。

11 **耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし。勝を得るものは第二の死に害わるることなし」**

「勝ちを得るもの」とは「勝者」ということ。常に勝っている者は決定的な死にそこなわれることはない。甦ったら、本当の永遠の生命の中に入ってしまう。

「キリストを受けとれば、死んでも死なないぞ」

と、キリストはヨハネ伝で言ってらっしゃる。ああいう言葉は形容詞ではない。本当に文字通りというか、文字の奥をつかまえないとね。

●ペルガモ

次はペルガモです。これはスミルナの北百キロにある所で、ここも偶像信仰です。特にここではアウグストゥスという皇帝を神殿に祀っていた。

12 **ペルガモに在る教会の使に書きおくれ。**
「両刃（もろは）の利き剣を持つもの斯く言う、13 **われ汝の住むところを知る、彼処（かしこ）にはサタンの座位（くらい）あり、汝わが名を保ち、わが忠実なる証人アンテパスが、汝等のうち即ちサタンの住む所にて殺されし時も、なお我を信ずる信仰を棄てざりき。**

アンテパスの殉教のことです。「サタンの座」というのは、特にサタンが君臨しているわけで、こういう言い方をしている。ゼウスの神殿だとか、いろいろな偶像だとかを言っているわけです。「アンテパス」という言葉はおもしろい。「アンティ　パース」といって「すべてに敵するもの」という意味です。

14 **然れど我なんじに責むべき一二（いちに）の事あり、汝の中にバラムの教えを保つ者どもあり、バラムはバラクに教え、彼をしてイスラエルの子孫の前に躓物（つまづき）を置かしめ、偶像に献げし物を食わせ、かつ淫行をなさしめたり。**

これは民数紀略の22章から25章あたりの所に書いてあります。要するに、信仰を口にしながら、実はこの世の財宝に心がよっているようなのをバラム的という。インチキなわけです。

15 **斯のごとく汝らの中にもニコライ宗の教えを保つ者あり。**

「ニコライ宗」というのもまた同じようなことで、やはりこの世と――ちょうど「パリサイ」に対して「サドカイ」というのがあったが――サドカイ式なところがあるわけです。

16 **されば悔改めよ、然らずば我すみやかに汝に到り、わが口の剣（つるぎ）にて彼らと戦わん。**17 **耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし、勝（かち）を得る者には我かくれたるマナを与えん、また受くる者の外、たれも知らざる新しき名を録したる白き石を与えん」**

「かくれたるマナ」というのは、出エジプト記のあのマナではなくて、本当の「天的な糧」という意味です。「白き石」というのは勝利の象徴だそうです。「新しき名」というのは――ちょうど仏教で戒名をやるでしょ――あれ式に、天界に入ると、天で新しい名を、新しきクリスチャンネームをもらうわけだ。

●テアテラ

今度はテアテラです。ペルガモの東南約65キロの所にあり、染色や毛織物の工業都市です。使徒行伝16章のルデヤという女はここから出たのだろうと言われています。

18 **テアテラに在る教会の使に書きおくれ。**
「目は焔（ほのお）のごとく、足は輝ける真鍮の如くなる神の子、かく言う、19 **われ汝の行為および汝の愛と信仰と職（つとめ）と忍耐とを知る、**

「職」という字は「ディアコニア」という字で、人のために奉仕して助けをすること。「ディアコニッセ」というのはそれから生じた。

又なんじの初の行為よりは後の行為の多きことを知る。

非常に大いに修練して良くなっている、と。

20されど我なんじに責むるべき所あり、汝はかの自ら預言者と称えて我が僕を教え惑し、淫行をなさしめ、偶像に献げし物を食わしむる女イゼベルを容れおけり。

もちろん、昔のイゼベルではない。昔のイゼベルみたいな女預言者がいたらしい。イゼベルはアハブ王の妃で偶像を入れたため、エリヤが偽りの預言者と戦ったことが、列王記略上の18章から列王記略下にわたって書いてある。

21我かれに悔改むる機を与うれど、その淫行を悔改むることを欲せず。22視よ、我かれを床に投げ入れん、又かれと共に姦淫を行う者も、その行為を悔改めずば、大いなる患難に投げ入れん。23またかれの子供を打ち殺さん、

皆そういう審判にあうと。これは実際、アハブ王の子供たちがそのように殺された事実があったから、それから来ている言葉らしい。

斯てもろもろの教会は、わが人の腎と心とを究むる者なるを知るべし、我は汝等おのおのの行為に随いて報いん。24我この他のテアテラの人にして未だかの教を受けず、所謂サタンの深きところを知らぬ汝らに斯くいう、我ほかの重を汝らに負わせじ。25ただ汝等はその有つところを我が到らん時まで保て。26勝を得て終に至るまで我が命ぜしことを守る者には、諸国の民を治むる権威を与えん。27彼は鉄の杖をもて之を治め、土の器を砕くが如くならん、我が父より我が受けたる権威のごとし。

ここに「権威」のことが書いてありますが、そういったこの世の勢力に対して、また偶像崇拝的なものに対して信仰にあるところの権威のことを非常にはっきり言っているわけです。

もちろん信仰の権威と言ったって、我々は

「自分の信仰に権威がある」

なんて思ったら大間違いです。権威はキリストのもの、聖霊のものです。聖霊が持っている権威です。自分はどこまでも平伏している。無です。自分には何も権威はない。この平伏し、無という情況においてこそ始めて本当の権威がでてくる。いわゆる謙遜ではない。こちら側はゼロです。そうしたら、御霊の権威が自然にそなわってくる。御霊の権威のある人は本当に平伏しの魂のひとです。それが自分の信仰の権威みたいになってくると、ヘタするとサタンになるよ、霊的傲慢になるから。

28我また彼に曙の明星を与えん。29耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし」

という不思議なことが書いてある。黙示録の終りの方でキリストのことが「曙の明星」と

いわれています。「キリストを与える」という言い方もおかしいけれども、

「我、汝に我を与う」

という言い方があるから、

「キリストをいただく」

と言ったって構わない。キリストのものに完全になったときに、

「曙の明星を与えん」

という表現が恩寵の表現として出てくるわけです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という素晴らしいところです。

●サルデス

黙示録３章に入ります。サルデスはテアテラの東南約50キロの所にあり、ここも織物、染色工業の町で、同じく非常に淫乱な、皇帝崇拝の所である。

[1]サルデスに在る教会の使に書きおくれ。

「神の七つの霊と七つの星とを持つ者かく言う、

「七つの霊」とは聖霊のこと。「七つの星」は、ある意味において、天使のこと。あまり意味を限定してもおかしいけれども、大体そういうことです。

われ汝の行為を知る、汝は生くる名あれど死にたる者なり。

「ダメだ、そんなのは」と。それは本当の行為ではないからです。

「生くる名あれど死にたる者なり」

という。クリスチャンの名はあれどもクリスチャンではないとか、大学生の名はあれども大学生ではないとか。レッテル大学生が多いからね。キリスト教界は、

「汝は生くる名あれど死にたる者なり」

といったような信仰が多いわけだ。

[2]なんじ目を覚し、殆ど死なんとする残りのものを堅うせよ、

もう全体としてはダメだけれども、残りのものがいるから、それだけはしっかり生命をつけてやれと。「堅うせよ」とは、「結びつけてやれ」ということです。

我なんじの行為のわが神の前に全からぬを見とめたり。

「全しとは認められない」という言い方をしても構わない。「全き」という字は「プレロオー」「充満する」という字です。充満していないというわけだ。

然れば汝の如何に受けしか、如何に聴きしかを思いいで、之を守りて悔改めよ、

3節はちょっとおもしろい。

「汝の如何に受けしか、如何に聴きしかを思いいでろ」

という。けれども、普通の教会では、本当に「如何に受けたか、如何に聴いたか」という

ことが言えるような「如何に」がなかなかない。そんなのを思いだすと、却ってダメになったりする。キリストの直弟子たち、パウロ等が語っているのは本当に「如何に受けしか、如何に聴きしか」でありますけれども、それはみな聖霊の器だから。キリスト自身が語り与えた福音はもの凄いんだ。それは「如何に受けしか、如何に聴きしか」なんだけれども、今度は、聞いている方が本当に「如何に」を聞いてない。こっちは聖霊の世界ではないから。聖霊を受けとってないから。

●御霊の体験

だから、キリストは、

「今はお前たちはダメだ、躓く。けれども、やがて私が受くべきバプテスマ、十字架を受けて、それから聖霊が降ったら、私が如何に語ったか、如何に為したかは全部わかるぞ。聖霊で目が覚めると、そうなるぞ」

と言われたわけです。「悔改めよ」とは、始めは良かったけれどもダメになったから再びもとに戻って、ということ。本当に聖霊を受ければ、そういうことではなくなるけれども。多少、人によって段階もありますけれども。

私は阿蘇でひっくり返った。坐っている身体がグーッと上がってしまって、それから全身しびれた。あれは決定的な経験なんです。それから私は御霊の世界からずれない。人間小池は躓いたり転んだりしたよ。けれども、そんなこととははっきり違う。そういう御霊の体験というものは、これを「思いいでよ」ではなく、いよいよ強くされているわけです。

手前の人はいつか本当にそこのところに入ってください。何も難しくない。無条件の世界だから。無条件を条件付けているから、難しいんです。

例えば、寝ていてちょっと目が覚めたら、祈るといい。そうすると、不思議なことが示されたりする、「ああ、そういうことか」と。そして、沈黙の祈りをする。そのうちに、ガタガタガタと震えだしたりする。何も声を出さなくたっていい。一番深い祈りは沈黙の祈りです。思われている世界はダメです、信仰は信入でなくては。全的に、全存在的に信じ入る。それを祈りの世界で体験しなくては。私はこうやって少しやっていると、もう異言になりそうになるから、止めるけれども。

「悔改めよ」とは「回帰せよ」ということです。

もし目を覚さずば盗人のごとく我きたらん、汝わが何れの時たるかを知らざるべし。

「盗人のごとく」とは言い方がおもしろいね、何も盗人を肯定しているわけではないけれども。「目を覚まさないでいると、突然やってくるぞ」と。

4 然れどサルデスにて衣を汚さぬもの数名あり、

少数の純粋な信者がいる。

彼らは白き衣を著(き)て我とともに歩まん、斯くするに相応(ふさわ)しき者なればなり。

「彼らは聖霊の衣を着てしまうぞ」

と。断食ということも、我慢して断食するのではない。この世の食べ物を断って、キリストを食べるために断食するのだから。これは楽しい。水だけは飲む。水を飲まない断食もあるけれども。キリストを食べる。普段にやってごらんなさい、何も三日なんかする必要はない。一食か二食絶って水だけ飲んで、

「これはわが体なり」

というキリストを霊的な祈りの世界で食べてごらんなさい。そうしたら、力がくるから。実際にやってみなければダメです。

5 勝(かち)を得る者は斯のごとく白き衣を著せられん、我その名を生命の書より消し落とさず、我が父のまえと御使の前とにてその名を言いあらわさん。

●ヒラデルヒヤ

次はヒラデルヒヤです。ここは非常に地震があった所です。紀元17年に大きな地震があった。それから後でまたティベリウスが再建したという。「フィラデルフィヤ」とは「兄弟愛」という良い名前だね。

7 ヒラデルヒヤにある教会の使に書きおくれ。

「聖なるもの真(まこと)なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉ずる者なく、閉ずれば開く者なき者かく言う、

「真なる者」とは「アーメンなる者」ということです。「ダビデ」というのは、王者、メシヤのこと、もちろんこれはキリストです。マタイ伝18章を参照するといい。天国の扉の鍵をちゃんと持っているという。

8 われ汝の行為を知る、視よ、我なんじの前に開けたる門を置く、これを閉じ得る者なし。

ありがたいではないですか。門が開いている。

「我は門なり」

という門が開いている。誰もそれを閉じられない。だから、平伏して入っていく。傲然と入ってはダメです。

汝すこしの力ありて我が言を守り、我が名を否(いな)まざりき。

「微力であったが、我が言を守って我が名を否まなかった、忠実であった」

と。あるがままの正直な姿を仰ったわけだ。

9 視よ、我サタンの会、すなわち自らユダヤ人と称えてユダヤ人にあらず、ただ虚偽(いつわり)をいう者の中より、或者(あるもの)をして汝の足下(あしもと)に来り拝せしめ、わが汝を愛せしことを知らしめん。

彼らが逆に「参りました！」と言ってやってくる、ということです。サタンは偽りの父だから、「虚偽」ということが出てくるわけです。

10 **汝わが忍耐の言を守りし故に、我なんじを守りて、地に住む者どもを試むるために全世界に来らんとする試練（こころみ）のときに免（まぬが）れしめん。**

「耐え忍び待って、よく御言にしがみついていたから、エライことが世界的に起きた時に、その試練に免れしめて救うぞ」と。

ルターの好きな詩篇46篇1節の、

「神はわれらの避所（さけどころ）また力なり」

という句を私は、

「キリストはわが避所なり」

と読む。キリストが我々の避所です。避所に入ると、力がくる。だから「力なり」と書いてある。あれをルターは「城」にしてしまったけれども。「固き城」ではなくて、「避所」です。その中に入って逃げていってしまう。逃げるのは、卑怯で逃げるのではない、本当の力を得るため入っていく。そして力がやってくる。

それで、この相対的現実が何であろうと、それと戦って勝つ。運命環境に負けない。いや、ダメであればあるほど、いよいよ逆に力は出てくる。聖霊の世界はそういうものです。絶対にヘコたれない。ヘコたれると思うのは、自分の力がそこに入っているからです。本当に自分がぬけてごらん。そうしたら、知らないけれども、とにかくエライ力が来ている。これは本当にありがたいよ。誰にどのように扱われようと、何と言われようと、一向差し支えない。

「汝知りたもう」

という所に入っているから。そして、この力は、己を迫害する者でも何でも全部これを包んでしまう、担ってしまう。そういう力を持つ。さっきの、火が消えてしまったりするようなポルユカルポスというのは凄い。カトリックの聖者の中には素晴らしい人がちょいちょいいるね。理屈の信仰ではダメです。

11 **われ速（すみや）かに来らん、汝の有（も）つものを守りて、汝の冠冕（かんむり）を人に奪われざれ。**

12 **われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、**

キリストは大黒柱です。そして、我々もその柱とされる。柱と言おうが、石と言おうが、宝石と言おうが、何と言おうがいいですよ、いろいろな表現がしてあるけれども。とにかく、神の国ののっぴきならない、ひとつの役割的存在をうけたまわるわけです。どんなことをしていてもいい。この世的な、偉い偉くないということではない。

日本人は、社会的ないろいろな評価の仕方でもって、有名校だ何だかんだと言っている。学校なんか一遍つぶしてしまった方がいい。やり直しだ。教育の大改革というのはそこから改革しなければダメだ。教育制度よりも教育者それ自身の頭の大改革、存在的には魂の

大改革をしなければ、いくら改革をしたってダメなんだ。たくさん小さな学校をつくった方がいい。その人がやりたいことを大いにやらせる。平均点が何点だ、偏差値がどうだなんてやっている、日本という国は全くくだらない。学校なんか入らないで、自分で独学でやった方がいい。ちょっと極端なことを言いましたが、私の気持はお分かりでしょう。

彼は再び外に出でざるべし、又かれの上に、わが神の名および我が神の都、すなわち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と、我が新しき名とを書き記さん。

●ラオデキヤ

今度は、ラオデキヤです。一番南にある。メアンデル川の支流のリュコス川の谷間にある。

14 **ラオデキヤに在る教会の使に書きおくれ。**

「アァメンたる者、忠実なる真なる証人、神の造り給うものの本源たる者かく言う、

「アァメンたる者」とは、アァメンたる神、アァメンたるキリストのこと。「造り給うものの本源」とは、造り給うものより先に本源であったということで、これはキリストのことです。

15 **われ汝の行為を知る、なんじは冷かにもあらず熱きにもあらず、我は寧ろ汝が冷かならんか、熱からんかを願う。**16 **かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微温が故に、我なんじを我が口より吐出さん。**

ダンテが『神曲』で、

「良くもなく悪しくもない中間の連中がいたが、地獄もこれを入れることを恥じ、天国もそれを入れることを潔しとしない。地獄の門外にこんなに訳の分からない中間者流がいるかと、びっくりした」

と書いてある。善でもなく悪でもない、いい加減なやつというわけです。「熱くもなく冷たくもなく、生ぬるい」と。

17 **なんじ、我は富めり、豊なり、乏しき所なしと言いて、己が悩める者・憐むべき者・貧しき者・盲目なる者・裸なる者たるを知らざれば、**

「本当はそうなのに、それが分かっていない」というわけです。

18 **我なんじに勧む、なんじ我より火にて煉りたる金を買いて富め、**

これはみな比喩的な表現です。「火にて煉りたる金」というのは、艱難の火で練られたところの実力ある信仰のことをいう。

白き衣を買いて身に纏い、

もちろん、「白き衣」とはキリストの義であり、また霊である。

なんじの裸体の恥を露さざれ、

やはり、キリストの衣を着ること。「キリストを着よ」という言葉もあるでしょ。

目薬を買いて汝の目に塗り、見ることを得よ。

「目薬」というのは聖霊の例えだそうです。聖霊の目薬によって目がちゃんと明らかになる。霊的な祈りをした後というのは、非常によく見える。

19 **凡てわが愛する者は、我これを戒め、之を懲す(こら)。**

お母さんが甘くて、懲らすときにピシャッと叩いたり、あるいははっきりものを言わないと、後でやっかいな子供ができるんだ。ドイツの婦人が言うよ、

「日本のお母さんは甘すぎる」

と。何も、しょっちゅう小言を言って、ピシャッピシャッ叩くのはもちろん良くない。硬軟よろしくを得なければいかん。「懲す」という字はむしろ「薫育(くんいく)する」という字です。「教育」という字のギリシア語は「薫育」という言った方が本当はいいくらいな字です。

この故に、なんじ励みて悔改めよ。

「励みて」と言うよりもむしろ「大いに情熱を燃やして」という字です。「立ち返れ」と。

20 **視よ、われ戸の外に立ちて叩く、**

これは素晴らしいところです、黙示録で私の一番好きなところの一つです。

人もし我が声を聞きて戸を開かば、我その内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん。

キリストは御馳走のことを、饗宴のことを時々仰るが、キリストというのはいわゆる禁欲ではない。非常に自然的な歓びを楽しんだ。

「食を貪(むさぼ)るもの、酒を好むもの」

と言われたけれども、何もしょっちゅうお酒を飲んでいるわけではない。ごく自然に楽しむ。

「一緒に食べるぞ」

と。これは我々は聖霊を食べないと。キリストは、

「我を飲め、我を食らえ」

と仰ったが、キリストが入ってきたから、キリストを食べようというわけだ。

「われ戸の外に立ちて叩く」

キリストは時々やってこられて、魂の扉を叩いておられるんだ。

「何を考えているか、人のことを考えたり、自分のことを考えるな。こっちを見ろ。相対的現実に目が眩むな、耳を聾するな。本当の現実の私のこの音が聞こえないか」

というわけです。それがこの「われ戸の外に立ちて叩く」ということです。

「叩けよ、さらば開かれん」

というけれどもキリストは自分の方で叩いている。気がついたら、それはしょっちゅう聞こえてくるはずです。思い煩いをやっているうちは、その戸を叩いている声が聞こえない。だから、

「思い煩うなかれ」

と言う。

我その内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん。

非常に交わりの深い霊交の世界です。マタイ伝8章、26章、ルカ伝22章、そういった所にキリストの饗宴のことが書いてある。

21 **勝を得る者には我とともに我が座位（くらい）に坐することを許さん、**

これは凄いよ、王座の中に入れられる。

我の勝を得しとき、我が父とともに其の御座（みくら）に坐したるが如し。

「天界の一番凄いところに入れられてしまう」

ということです。

「生ぬるい者らが悔改めれば、そういうことになるぞ」

と。

●御霊の勝利

これで3章まで一応済んだわけです。「悔改めろ」と書いてないところは、スミルナとフィラデルフィアだけです。後は全部「悔改めろ」と書いてある。それでは、スミルナとフィラデルフィアは悔改めなくてもよいかというと、どっこいそうはいかん。それぞれ誉められてはいますけれども、ダメなところがある。「悔改めろ」と書いてなくたって、我々は回帰、帰入しなければいかん。

「悔改めよとキリストが言われたのは、クリスチャンの全生涯はそういうはずものである」

とルターが言った。だから、ここに書いてなくても、全部これは、

「悔改めよ、回帰せよ、帰入せよ、よく祈り入れ」

ということです。これはどの教会でもです。この小アジアの「七つの教会」は歴史的に七つだけれども、これは人類の歴史の終るまで、キリスト者たちの集まりというものはみなこの七つの戒めの中に入っている。中心は何かというと、

「回帰して、そして忠実を、真を貫け」

ということです。キリストの表現がいろいろ書いてある。全部キリストの姿が出てくる。勝ちを得た者の内容は、

「生命の樹、第二の死ではない永生、天界の名と聖霊の権威、聖霊の白き衣、聖所の柱、御座に坐せられる」

という素晴らしいことが書いてある。そういうようなものは全部、我々の日常生活の中に、霊的な意味において活きてこなくてはいかん。

「勝ちを得るものは」

とあるけれども、

「我々は聖霊にあっては常勝である」

ということが、私たちの根源の現実でなくてはいかん。常勝者ということ。私たちは勝てませんよ。けれども、御霊が勝ってくださる。それは体験できます。もちろん、鍛えられる。これでいいというところはない。段々鍛えられていく。だから、「勝ちを得るものは」という、毎日の生活が勝利的なことであるためには、聖霊が内住してなければダメです、聖霊の人にならなければ。「ならなければ」ではない。

「本当にキリストを受ければ、聖霊の人たらざるを得ない」

と。それが福音、福の音信（よろこびのおとずれ）ではないですか。そして、どんな人に対しても本当に開けっ放しの気持です、何も塞ぐことはない。我々自身が開けたる門なんです、

「ああ、いつでもお入りください。聖霊の衣はいくらでも分けてあげますよ」

と言う。それは愛の世界です。そういうような事態を我々はこの七つの教会への言葉の中から自分でもって活かしていかなければ。ただ、項目を並べているわけではない。そうすると、この七つの教会に言われている言葉は我々の日常生活の中で時々読んで、

「ああ、こういうことだ、こういうことだ」

と言って、これが身についてくるわけです。その人その人によって身につけるところは違っていい。全部身につける必要はひとつもない。その人の特色で結構です。そういうような意味において、有機体的構造でもって、この七つの教会の言葉というものがあるわけです。

ポイントは「回帰」、悔改めということと、「勝利」ということの、この二つです。御霊の勝利、御霊の力。回帰でもってキリストに入ると、人助けの「転入」ができる。回帰・転入というわけです。そうすると、これは非常に楽しい消息になる。その当時の教会がどうだったこうだったは、どうでもいい。そのようにして、黙示録第1～3章は読みたいと思います。